正午の時刻呼称（表記）について

天沼 寧

正午、すなわち、24時間制でいうと、ちょうど12時の時刻を、1日を、午前と午後とに分けて呼える12時間制では、「0時」というか、午後12時というか。更に、真夜中の「0時」（又は、「12時」）と区別するため、これにより午前午後を区別して呼える場合に、どのように呼えるか、最も、理にかなっており、常識的であるかということについて考えてみたい。

この場合、理屈からいえば、「午前0時」、「午後0時」、「午前12時」、「午後12時」の四つの呼称が考えられる。なお、この論では、正午の直後から午後1時（24時間制でいうと、「13時」）直前までの時刻呼称を、「午前0時〜00分」というか、「午後12時〜00分」というかについても併せて採り上げる。

24時間制の呼称では、「0時」と「24時」とは、全く同一の時刻を表している。すなわち、その一瞬の時刻を、ある1日1日1日の瞬間とみさえれば、「0時」（もっと詳しくいうと、「0時00分」ということになり、これを、「0:00」と表記したり、「00:00」とように表したりする。）ということになり、それぞれ1日1日1日の瞬間とみさえれば、「24時」（「24時00分」、「24:00」）ということになるわけである。以下、この論において、「＜＞」に包んで示す時刻は、24時間制による呼称・表示を表すものとする。

12時間制でも同様であって、「0時」と「12時」とは、全く同じ時刻を表している。すなわち、真夜中の「0時」、又は、真昼の「12時」（正午）を、ある1日1日1日の瞬間とみさえれば、「0時」ということになるであろうし、ある1日1日1日の瞬間とみさえれば、午前0時と呼べば、「12時」と呼べるのがふさわしいということになる。

「正午」というのは、「正午の時刻」ということ。つまり、「正午の時刻」のことを、また、「正午の時刻」というのは、正午の呼称方の一つで、現在の24時間制の呼称を十二支に当てる呼称であり、現在の「0時」が、「正午の時刻」に当たる。したがって、本当のことといえば、「正午」すなわち「午前0時」及び、真夜中0時（0時）は、「午前」でもなく、「午後」でもない瞬間であるということになる。しかし、しばしば、例えば、「午前0時」といった、「午後0時」といったのではなく、「0時」としただけのものは、24時間制の呼称方では、これで十分であるけれども、12時間制の呼称方では、真夜中のことか、正午のことか、はっきりしない場合もあるからであろう。もっとも、たいていの場合は、常識上、おそらく判断がつくであろう。

実例について まず、次に示した。
[図-1]～[図-3]は、いずれも、新聞広告であるが、その必要部分だけを示したものです。[図-1]は、民間のテレビ放送のある番組の広告である。これには、
「きょう／正午」とあり、しかも、その右側に「今見開店」とあるので、「12時」であることは、まず、だれにも分かることはずである。[図-2]も、やはり、民間のテレビ放送局から放送される番組の広告である。これは、時刻を「0：30」と表示しているが、「ヒル」と記載してあり、やはり「12：30」を示していることがはっきりしている。なお、民間放送局では、深夜放送があるので、段に、「0：30」とだけ示されたのでは、あるいは、「00：30」とともに示されることもあるかもしれない。以上のように、まず、間違いないかぎり遠えの起こりようのない表示である。[図-3]は、ある書店の開店広告である。これは「12時」とあるだけで、理論からすれば、これは、昼の12時か、真夜中の12時かがはっきり分からないということもあるが、書店の開店ということから考えれば、われわれとしては、常識的に、昼の12時のことと、まず、飛行なく理解するのが普通である。したがって、この「12時」の代わりに、「正午」などとしても、もちろん、差し支えははないが、「ひる」とか、真っ昼間」と語ち書きするのは、かえっておかしい。すなわち、これで十分であると考えられる。

ところで、この[図-4]の場合は、多少問題がある。この広告を出したのは、洋菓子・アイスクリーム・パンなどの販売店である。

夏の割引販売を、「午前10時」に開店して行うが、「ケーキ」だけは、「午後12時」から、というものである。常識上、2時間遅れの正午からであることは、容易に想像がつくが、こう、はっきりと、午前と対比させて、「午後12時」としてあると、一瞬とまごいを感じさせはしないか。

次の[図-5]も、同様である。常識からいても、大学の入学式が、深夜の12時から開催されるのは、まず、あり得ないこと、まして、短大のほうが、科によって、午前9時から、午後3時からとの2回、開催され、その中に、「大学院・学部」の入学式が行われるのであるから、どうしても、「正午」かと受け取るべきであるし、この案内状を受け取った人も、まず、間違いない。
受け取ったであろうと思われるけれども、『午後十二時より』という表現は気になるところである。

同様に例に、某団体が創造活動年間の記念式典を行う際の、部内者への招待に、「午後十二時前集合（午後二時開始）」としてあったものがある。『午後二時開始』とあること、及び、記念式典をするのに深夜の12時30分に集合させることとは、常識上、ないと考えられるから、これでも誤解を生じることはなかったであろうが、少々気になる表現である。この場合、「十二時三十分集合、十四時開始」としておくと、別に問題はないはずである。あるいは、「午後二時開始」は、そのままとしても、「午後十二時三十分」とせず、単に、「午後三十分」とするか、「午後零時三十分」としておけば誤解は生じない。

ただし、『12時』から『13時』までの時間を表す際に、「午後12時00分」というように表すのは、誤りであるとか、不適当であるといっているわけではない。場合によっては、誤解を生じるおそれもあるかもしれないので、避けたほうが無難であろうというまでのである。

午前・午後という呼称のが始まりある1日の始まりの瞬間から『12時』への至る直前の瞬間までを、「午前」と称し、『12時』を過ぎた直後の瞬間から、その1日の終わりの瞬間の直前までを「午後」と称することに、明治5年に、太陽暦（新暦）を廃して、太陽暦（新暦）を採用することを決めた大政官公布告に明らかである。[大政官公布告 第三百三十七号、明治5年11月9日。（ただし、旧暦。）]

今般改暦ノ従附書 伝書ノ通数 仰申核査此旨相延候事
（別紙）

明治五年十一月九日

一今日太陰暦ヲ廃シ太陽暦御崩御候相承候＝付来ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ヲ定候事

但新暦週版出来次第頭書候事

— 55 —
一応の表の一部

<table>
<thead>
<tr>
<th>午前</th>
<th>子刻</th>
<th>丑刻</th>
<th>寅刻</th>
<th>卯刻</th>
<th>辰刻</th>
<th>巳刻</th>
<th>午刻</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>四時</td>
<td>五時</td>
<td>六時</td>
<td>七時</td>
<td>八時</td>
<td>九時</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>九時</td>
<td>半刻</td>
<td>頼合時刻</td>
<td>半刻</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

右之通被定候事

【注：以上は、内閣官報第號の『法令全書』（ただし、原書用の刻候表）による。原文を縦組み、また、引用に当たって漢字の字型は、現行適用のものとした。】

以上の太政官布告の「時刻表」によれば、「12時」は、「午前12時」ということになる。そして、「0時」は、「午前零時」、又は、「午後十二時」ということになる。

また、はっきりした日付は分からないが、同じ年の11月に、大蔵省（内務省）からも、次の通りの通知が出ている。【注：引用は、上に同じ。】

【前略】

新潟州旅行ノ日ヨリノ長短ヲ拘ラスノ刻ヒテヨリノ刻尾ヲ平均二十四ニ割リ其一ヲ
一時ヲ斧ヲノ上刻ヨリ午前ヲ上刻マテヲ午前ヲ上刻ヨリノ上刻マテヲ午後ヲ刻ヒテ定
候条郵便局裏資料ヲ通じて其合ノ刻尾ヲ以テ午前ヲ何時ヲ午後ヲ何時ヲ刻ヒテ記ヨリ前記ヲ可申請

「正午」の呼称

上記の二つの公文書では、「正午」という呼称を用いていないが、明治24年
に完成した大和観の『言語性』では、その「正午（時）」の項の「正午」において、おそらくは、前記
の大和観布告を踏みて、記したであろうと思われる次の語釈の中で「正午」を用いている。【なお、「正午」という語は、新聞などで、もっと古くから使われているが、これについては、後に
述べる。】

一昼夜ノ間ヲ着元ニ割リタル称。一昼夜ヲ、二十四ニ分セテ、最初ノ第一時ヨリ正午ノ正午ノ
ニ至ル間ヲ十二ニ分セ、第一時ヨリ数エテ、第二十二時（正午）ヨリハルト、コメヲ午前ヲトヨフ不但、
又、正午ヨリ正午ノ正午ノ至ルモ、前ノ同ジク、コレヲ午後ヲトヨフ。【以下、省略。】

- 56 -
『音波』では、語呂の「乙酉」を用いて、旧制の「亥時」を「未」、今制、と入れ換えて、それぞれを示す。これにより、改元の表を示している。この表では、「正午」に「マヒル」と振り仮名としている。

<table>
<thead>
<tr>
<th>午前</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第一時</td>
</tr>
<tr>
<td>丑時</td>
</tr>
</tbody>
</table>

現在では、一般に時刻の呼称に、「第」とつけて、例えば「1時、2時・・・」というように呼べるが、この表によれば、「第一時、第二時、・・・」ということになっている。また、「＜12時＞」は、「午前十二時」とあり、「＜24時＞」は、「午前十二時」と呼べるわけである。

時刻の呼称に、「第1」をつけることは、きわど引用した太政官の布告には見られず、また、大蔵省（駅通院）の通知にも見えないけれども、公によく使っていたこともあるようであり、例えば、やはり、太政官が明治5年11月14日（旧暦）に出した「明治六年新歳式」に関する通知に、

一日 午前第四時 四方拜
《中略》
三日 同第二時 元始祭 賢所 皇室 神殿等 御親祭
《下略》
とある。[前掲の『法令全書』による。]

さて、新暦が実施された明治6年以降、正午の時刻呼称（表記）と、＜12時＞の直後から、＜13時＞の直前までの呼称（表記）はどのようなであろうか、いろいろの資料についてみると、次の通りである。

○ 新橋・横浜間の各駅の列車発着時刻表が、明治7年5月28日、工部省布告の別紙にあるが、上り列車は、1日に12本出ることになっており、横浜・新橋間を58分で結ぶ。その間、金川・鶴見・川崎・品川の4駅に停車することになっている。今、その時刻表のうちから、主としてこの論に関係のある箇所だけを抜粋してみると、次の通りである。
すなわち、午前発と午後発の、それぞれの最初の列車、始発駅の時刻だけに、「午前」「午後」を記し、他は、すべて省略してある。「<12時>」は、午前帯も午後帯も既定せず、「<12時>」としてある。「<12時>」から、「<13時>」までの時刻は、「<12時>」と同じである。換言中での12時「<24時>」については、開始列車の発車時刻が「(午後)十一時」で、新橋列車が「(午後)十二時五十八分」であるので、不透明である。

次に、明治7年5月11日に、大阪・新大阪間の鉄道を開業するのに当たって、前日の4日に、工部省（大日本鉄道会社）が発表した時刻表では、「汽車発着时刻表」とし、「上り車」、「下り車」として、大阪・新大阪・三宮・新橋の4駅の発着時刻を示しているが、前のものと比べると少し簡単になった。途中駅については、(おそらく)発着時刻だけになっている。しかし、この表では、次の通り、時刻取引を注目すべきことが見られる。なお、実際の表は、さきのものと同様、緩急の順序がある。この中に引用に当たって、短縮版の便宜上、けいを省略する。

<p>| |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>神戸</td>
</tr>
<tr>
<td>午後五時五十五分</td>
</tr>
<tr>
<td>午後五時五十五分</td>
</tr>
<tr>
<td>午後五時五十五分</td>
</tr>
<tr>
<td>午後五時五十五分</td>
</tr>
</tbody>
</table>

すなわち、「午前」帯と「午後」帯の、それぞれの最初の列車、発着駅の時刻だけに、「午前」「午後」を記し、他は、すべて省略してある。「<12時>」は、午前帯も午後帯も既定せず、「<12時>」を記している。これについて、「<12時>」から、「<13時>」までの時刻は、「<12時>」と同じである。換言中での12時「<24時>」については、開始列車の発車時刻が「(午後)十一時」で、新橋列車が「(午後)十二時五十八分」であるので、不透明である。

次に、明治7年5月11日に、大阪・新大阪間の鉄道を開業するのに当たって、前日の4日に、工部省（大日本鉄道会社）が発表した時刻表では、「汽車発着時間表」とし、「上り車」、「下り車」として、大阪・新大阪・三宮・新橋の4駅の発着時刻を示しているが、前のものと比べると少し簡単になった。途中駅については、(おそらく)発着時刻だけになっている。しかし、この表では、次の通り、時刻取引を注目すべきことが見られる。なお、実際の表は、さきのものと同様、緩急の順序がある。この中に引用に当たって、短縮版の便宜上、けいを省略する。

<p>| |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>神戸</td>
</tr>
<tr>
<td>午後五時五十五分</td>
</tr>
<tr>
<td>午後五時五十五分</td>
</tr>
<tr>
<td>午後五時五十五分</td>
</tr>
<tr>
<td>午後五時五十五分</td>
</tr>
</tbody>
</table>

すなわち、「午前」帯と「午後」帯の、それぞれの最初の列車、発着駅の時刻だけに、「午前」「午後」を記し、他は、すべて省略してある。「<12時>」は、午前帯も午後帯も既定せず、「<12時>」を記している。これについて、「<12時>」から、「<13時>」までの時刻は、「<12時>」と同じである。換言中での12時「<24時>」については、開始列車の発車時刻が「(午後)十一時」で、新橋列車が「(午後)十二時五十八分」であるので、不透明である。

次に、明治7年5月11日に、大阪・新大阪間の鉄道を開業するのに当たって、前日の4日に、工部省（大日本鉄道会社）が発表した時刻表では、「汽車発着時間表」とし、「上り車」、「下り車」として、大阪・新大阪・三宮・新橋の4駅の発着時刻を示しているが、前のものと比べると少し簡単になった。途中駅については、(おそらく)発着時刻だけになっている。しかし、この表では、次の通り、時刻取引を注目すべきことが見られる。なお、実際の表は、さきのものと同様、緩急の順序がある。この中に引用に当たって、短縮版の便宜上、けいを省略する。
関係記事，及び，喜多川周之氏蔵の「明治23年発行の東海道線時刻表」が掲げてあるが，それによると、「朝野新聞」の記事に，

・・・去れば，下り列車，午前九時十分（一番）新橋発の汽船は，其日午前十一時廿分京都に着し，・・・，同午後四時四十五分（四番）は夜中急行にて翌日正午十二時五十分神戸に着すものをとす・・

【注】原稿は，原稿のみ。

とある。これによれば，＜12時〇〇分＞を，「正午十二時〇〇分」と呼称（表記）していたわけである。同じページに掲げてある明治23年発行の時刻表に示してある時刻，及び，その表記は，午前・午後を表示していないが，「朝野新聞」の記事と合わせて判断すると，次のようである。（ただし，抜粋である。原稿は，原稿のみ。）

<table>
<thead>
<tr>
<th>明治23年の時刻表</th>
<th>24時間制による時刻</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>新橋発，六時〇十分</td>
<td>06:10</td>
</tr>
<tr>
<td>静岡県，十二時廿分</td>
<td>12:14</td>
</tr>
<tr>
<td>静岡県，十二時廿九分</td>
<td>12:19</td>
</tr>
<tr>
<td>岩田発，一時〇四分</td>
<td>13:04</td>
</tr>
<tr>
<td>（一番列車）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>新橋発，二時廿分</td>
<td>14:30</td>
</tr>
<tr>
<td>静岡県，九時</td>
<td>21:00</td>
</tr>
<tr>
<td>（三番列車）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>新橋発，四時十四分</td>
<td>16:45</td>
</tr>
<tr>
<td>岩田発，十一時四十三分</td>
<td>23:43</td>
</tr>
<tr>
<td>（四番列車）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>夜中急行</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>岩田発，十二時廿一分</td>
<td>00:11</td>
</tr>
<tr>
<td>岩田発，一時十二分</td>
<td>01:16</td>
</tr>
</tbody>
</table>

この明治23年発行の東海道線時刻表は，どこで発行したのか「太陽コレクション」による限り明らかではないが，新橋発の時刻でいっても，上から順に，「六時〇十分，九時四十五分，二時廿分，四時十四分」と並べてあるから，上二つは，午前であり，下の二つは，午後であると推察はできるものの，今日からみれば，何ともなくも足りない感じがするものである。

＜12時〇〇分＞のことを，「朝野新聞」では，さきに引用したように，「正午十二時廿分」と表しているが，現在では，ほとんど使われていないといってよい。このような表し方は，もっと早い時期から使われている。今，前掲「太陽コレクション かわら版・新聞」の「Ⅲ」，「Ⅳ」（本報）に掲載するによって，「正午」，及び，「正午十二時〇〇分」の例を掲載する（以下，引用において，関係箇所を含む前掲を抄出，抜粋の字体は，現行雑誌のものを用いた。なお，原稿は，原稿のみである。）

- 寒暖計，正午，六十三度。[前掲毎日新聞，明治4.9.24；Ⅲ133ページ]
- 今二十三日正午十二時，横須賀原愛子分旅，皇子御降誕披露情景表，内布告候事。[読売新聞別号，明治10.9.24；Ⅲ67ページ]
- 昨日正午十二時四十五分に鹿児島の・・・[読売新聞付録，明治10.9.25；Ⅲ巻頭特別付録]
- 午前七時出店正午十二時，津波，[第六則立銀行広告，高知自由新聞，明治15.7.16；Ⅲ85ページ]

以上のほか，＜12時＞，＜12時〇〇分＞，＜0時＞，＜0時〇〇分＞の呼称・表記を，「太陽コレクション」の「Ⅲ」，及び，その後に続いて出た「Ⅳ」（昭和53.12.5発行）の中から，目につい

--- 59 ---
たものを、順序不同に掲げれば、次のようである。

■ 二月半十八日 にせ日 木 新月午前初時四十分
■ 八月半三十一日 にせ日 土 にせ日月 午前初時四十分
■ 九月半三十日 に八日 月 午前初時四十分

その他、「東京日日新聞」の明治5年11月20日の「附録」は、太陽暦採用の布告の発出に応じて、明治6年の祝祭日、二十四節気、月の満ち欠け等を記したものであるが、その中には、

<table>
<thead>
<tr>
<th>forenoon</th>
<th>morning</th>
<th>afternoon</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>午前</td>
<td>朝</td>
<td>畏々</td>
</tr>
<tr>
<td>すばる</td>
<td>つるぎ</td>
<td>ひるまえ</td>
</tr>
<tr>
<td>Hiru-maye</td>
<td>Asa; chô; kesa; hirumaye.</td>
<td>Hiru-maye</td>
</tr>
<tr>
<td>Hiru-maye</td>
<td>Asa; chô; kesa; hirumaye.</td>
<td>Hiru-maye</td>
</tr>
<tr>
<td>Hiru-mae.</td>
<td>Asa; chô; kesa; hirumae.</td>
<td>Hiru-mae.</td>
</tr>
<tr>
<td>Hiru-mae.</td>
<td>Asa; chô; kesa; hirumae.</td>
<td>Hiru-mae.</td>
</tr>
</tbody>
</table>
以上で分かる通り、「午前」、「午後」は、訳語として、ヘボンの辞書の英和の部でも、明治19年刊の第3版に採録されていないのみならず、和英の部でも、初版・再版には、見出し語としてなく、第3版に至って採録されている。なお、「正午」は、第3版にもない。

国語辞典では、先に述べたように、「言葉」では、「正午」のほか、「午前」も「午後」も見出し語として採録しておらず、それに続く、「日本大辞書」、「日本大辞典」、「ことわざの泉」、「辞林」、「言泉」など、すべて、この3語を見出し語として立てている。また、近ごろでは、あまり一般的とはいいえなくなった「午時（ごじ）」も採録している。そして戦後、新しく福栄社の小型辞典では、「午時」を欠くものが多い。なお、ついでにいえば、「正午時（じゅうにじ）」を見出し語として採録しているものは、「言葉」、「日本大辞書」、「辞林」等であるが、近ごろのものにはほとんど見当たらない。ところが、「午時（ごじ）」は、「ことわざの泉」、「言泉」、「大日本国語辞典」等にはあるが、それ以前の辞典にはないのに対し、近ごろのものには、ほとんどれなく採録されている。

国語辞典の語源における時刻表示　　明治時代から昭和53年4月までに発行された各種国語辞典40冊について、見出し語「しょうご（正午）」に対する語源の中にある時刻の呼称（類記）を調べたところ、結果は、右のようであった。このうち、「言葉」、他8冊の辞典では、「正午時（じゅうにじ）」を含む小品語を含むものと、時刻を含まないもの、他23冊には、いずれも、時刻呼称があるが、時刻表示だけのものと、「正午時（じゅうにじ）」を含むもの、更に、「正午時（じゅうにじ）」及び、「正午時（じゅうにじ）」を含むもの、時刻表示があるものである。ここでは、その時刻表示についてだけ見たものである。同様に、「正午時（じゅうにじ）」呼称は、他の辞典にも存在しているものであるが、圧倒的に、他の呼称を含むものがあるを知れば、時刻表示をしている辞典23冊中、23冊あって、71.8%を占めている。次いで、「午前正午時」、「午後正午時」、「午前正午時」の順であり、「午前正午時」というものもある。なお、NHKは、放送では、「正午」という、「午前0時」は原則として使わないとのことである。

現在の新聞での時刻表示　現在の諸新聞の記事では、どのように発しているか、次に、順序不同に、幾つかの例を挙げてみよう。（なお、新聞掲載の記事については「夕方」は、夕方であることを、○で囲んだ数字は、新聞ページの番号を示す。また、下線は、筆者が加えたものである。）

1 </12:00>の表し方

- 男なら世界記録の一つを持ってみたいじゃありませんか。東京都江東区に住む・・・が、十八日正午から・・・[昭和33.11.9、朝日③]
- 告別式が、三十日正午から・・・[昭和32.12.30、読売③]
- これが朝七時の送電距離は変化しないものの、午前十分には三メ、正午には一・五メ、程度に減少し・・・[道路の速やか（昭和32.2.4、朝日夕刊④]]
- 郵政省は、きょう十三日正午から、千代田区・・・[昭和33.7.13、読売②]
- 二十五年前、日本テレビが開局した二十八年八月二十日までの正午、テレビＣＭ第一号が放送された。[昭和53.4.6、読売②]
- 受け付けは、十四日まで（十二、十三日を除く）の正午から午後三時までです。[昭和53.8.
10. 昨日の日曜日

○ 父母たちの話を聞きると、正午過ぎ、突然雷鳴とともに土砂降りになった。[昭和53.8.18, 朝日②]
○ 頃心では、正午前からパラパラと通り雨が降り、・・・[昭和53.8.17, 朝日(夕)]
以上のように、ほとんどの場合、<12:00>を表すには、時間表示でなく、「正午」を用いていることが多い。しかし、ただ、1例ではあるが、

○ ・・・二日午後零時、老寡のため、・・・[昭和53.10.4, 朝日①]

というのがあった。

2 <12:00>の表し方

○ ・・・西独ルートヘンツ機の乗っ取り犯は、十七日午後零時三十分（日本時間）を、以下同じ。・・・[昭和53.10.18, 朝日②]
○ この試合、午後零時五十九分に開始され、巨人九回裏の攻撃が続いたのは、・・・[昭和51.12.5, 朝日①]
○ これらの日には東京、名古屋、新大阪で始発列車が動くのは午夜零時半すぎになる。[昭和53.4.10, 朝日③]
○ 同日午後零時六分ごろ、同NHKの・・・[昭和52.4.4, 朝日①]

以上のように、ほとんどの場合、「午後零時〇〇分」と表示している。「零」は、記事中ではアラビア数字の「0」ではなく、漢字の「零」を使っている。

3 <00:00> すなわち、<24:00>の表し方。

○ 新宿だけで十五件のチェーン店を持つチャペローでは、この日営業したものの、午前零時までの「門限」をつけ。[昭和53.12.25, 朝日①]
○ このため、ソウルから帰国がドッグに行きやすい地方に出る旧四月を選び、しかも夜間通行禁止時間帯（午前零時から午前四時まで）の未明にする計算だったと見られる。[昭和52.4.25, 朝日(夕)]
○ 18日午前零時 犯人側はさらに期限を延長、「最終の最終」期限は十八日午前九時半とされる。[昭和52.10.18, 朝日①]
○ 二十五日午前零時すぎ、頭がい底骨折などで死亡した。[昭和52.4.25, 朝日(夕)]
○ 午前零時近くになってからは、次の日もたれしないよう、もっと軽いパン頭に――。[朝日生のための夜食] [昭和53.1.31, 朝日①]

ややもすれば、漢数字の「零」で表しているようである。が、天気予報の欄には、雑誌入りで、「・・・
日中も気温は下がり続け、二十四時の一〇・八度が最低気温というはだ寒い一日だった。」[昭和53.10.8, 朝日(夕)]と、「二十四時」を使ってもあったが。
4 〈00:00〉の表し方

○ 三日午前零時十五分、急性心筋症逝去のため。・・・[昭和52.11.4、読売③]
○ 気象庁は一日午前零時半、この「春あらし」については「春一番」と認定した。[昭和53.3.1、朝日①]
○ 一日の最終列車は、東京着が二日午前零時二十四分。・・・[昭和53.3.2、朝日(夕)③]

この場合でも、新聞では、原則として、「午前零時〇〇分」と表しているようである。

以上は、新聞における表し方で、一般記事の場合であるが、ある事件を、時の経過を追って報道する場合を、『ドキュメンタリー』などといっているようであるが、その時刻表示は、アラビア数字を用いていることが多い。例えば、[以下、引用にあたって、必要なと思われる時間のみを抜粋し、他は、多く略してある。また、原文は、時間ごとに改行しているが、引用にあたっては、「/」で示した。]

○ 20日午後8時30分 大事故のチェンジ707機、バリのオルリ空港を離陸。/ 22日午前0時10分 外務省視察団が・・・/ 午後9時30分 大韓航空東京支店に・・・[昭和53.4.23、読売③]
○ 7時00分 前夜10時、母を出発した生徒、OB、父母ら千三百人のバス、甲子園着。/ 11時50分 「東京の」決勝のときは、・・・/ 12時05分 スタンドは無風、・・・/ 12時35分・・・/ 1時00分・・・[昭和53.8.14、朝日②]
○ 9時40分＝DPA、身代金引き渡しの場所と時刻を報道。/ 12時00分＝シュライヒ氏の息子からの・・・/ 13時00分＝/ 14時00分＝/ 18時00分＝GSG9部隊、ハイジャック機内に突入。・・・[昭和52.11.3、読売③]なお、最初の「9・40」は、10月16日のことを指す。]
○ 16日午後4時 土子さんは友人と四人で・・・/ 同4時20分〜30分 九条町の・・・/ ・・・/ 同8時すぎ・・・/ ・・・/ 17日午前0時 1日の新聞に当番モデルの・・・/ 同7時00分・・・/ 同午後0時00分 予定の時間になっても・・・/ 同7時00分・・・[昭和53.10.18、朝日②(注：新聞で氏名を略記しているが、ここでは抜粋した。)]

以上の例で明らかのように、時の経過を追っての記録なような記事では、その時刻表示に、いろいろのものが使われている。しかし、いずれにしても、誤解を生ずることは、まずないと思われる。

このほか、新聞では、ラジオ・テレビ関係の記事・番組では、特別の呼称を採っているようである。例えば、

○ 読売新聞は、きたる四月三日から日曜日を除く毎日、深夜の零時三十分（土曜日は深夜零時五十分）から・・・民放テレビ局を通じて、皆さまにお届けします。/この番組は「深夜十二時」現在、でき上がったばかりの・・・[昭和53.3.28、読売①]
○ ミセス&ミセス / ★日本 NHK 朝9時30分//
○ 話題の出演者 / (新番組) / ★TBS 前11時30分//
○ 日曜朝指導 / / NHK 昼10時15分//
○ 忍ぶ様（新番組）/ ★TBS 昼11時30分//
○ 野球狂の詩 / ★フジ 夜8時00分//

—— 60 ——
喜劇大安旅行（日本 深夜0・40）・・・

これのように、時刻によって、「朝・（午前）前・昼・（午後）後・夜・深夜」を冠して表示している。その区分は、放送開始から＜8時＞台までを「朝」、＜8時＞台から＜11時＞台までを「前」、＜12時＞台を「昼」、＜13時＞台から＜17時＞台までを「後」、＜18時＞台から＜23時＞台までを「夜」、＜0時＞台までを「深夜」をしているようである。

また、映画・演劇関係の広告では、その上映・開幕時刻を、午前・午後を冠しないで、アラビア数字で表示しているものが多い。しかし、＜12時＞台は、「12：00」のように表し、＜13時＞台は、「13：00」のように表している。その他の三行広告になると、午前は、「9.40」、「10.40」、「11.00」のように、＜12時＞台は、「12:15」、「12:50」などし、＜13時＞台以降は、「13:00」、「14:00」のように、数で表して、「・」を入れたり入れなかったりしている。

次に、求人関係の広告では、実際にさまざまな表彰をしているが、中には、右に項目に示したように、漢字とアラビア数字を併用したものの、「時」を表示し、「分」を略すもの、反対に、「時」だけを表示したものなどいろいろある。そして読組みの広告でも、アラビア数字を使用しているものがある、かなり目につき、また、24時間制の表示をしているものの中も多い。

そのほか広告では、午前・午後の代わりに、「a.m.」、「p.m.」を使っているものもある。この使い方がまちまちであるが、右に示したように、省略符号をつけたものの、つけないものの、時刻の前につけているもの、後ろにつけているものなどがある。

営業の場合は、新大橋では、昭和18年から、24時間制を採用し、他の交通機関でも、これにならっているので、24時間制による表示も、われわれにとって、ある程度身近なものであるといえる。列車の発着時刻の表示、列車時刻表などはすべて、24時間制の表示である。新橋駅の乗車・降車の案内が、大きな新橋には、関係事業として、その新橋駅の名を冠した旅行会というようなものが、本紙とは別に発刊されているが、本紙と同様の広告が本紙と共に配布されることもある。その中の記事や広告では、24時間制の表示をしているものがある。

24時間制の表示でも、「2：00」なる場合、または、「2:00」のような表示であるが、ききのこの稿の6ページで引用したように、気象関係の場合にはあるが、「二十四時」と呼んだ例が1例あったし、広告では、ある飲食店の広告に「営業時間 10:00～24:00」（昭和54.1.15付け、キャッシュレス 0）とあった。これらは珍しい例である。

まとめ　「正午」、及び、「正午過ぎ」の時刻呼称（表記）の実態は、大体以上の通りである。しかし、社会における実情は、はるかに複雑で、簡単に割り切って言うことは難しいようである。国鉄を中心に、交通機関関係では、24時間制を採用しており、これによって、われわれの日常生活でも、24時間制による時刻呼称がある程度普及しており、これを無視するわけにはいかない。24時間制では、「正午」は「12時」であり、「正午過ぎ」は、「12時OO分」である。時に計時や掲時計のデジタル表示のものも、ほとんどるもの、「12:00」、「12:01」などという表示である。

ところが、電車番などにある大きな建物などを取り付けてある電光式のデジタル時計では、「10:00」、「10:00」の表示のものと、「10:00」、「10:01」の表示のものがある。また、時計（アナログ）の時計では、文字盤に数字を記しているものでも、「0」を絶対に表することは、周知の通りである。

- 64 -
新聞では、一般記事の紙面では、「正午」の場合には、時刻表示でなく、「正午」を使うことが普通であり、真夜中の場合は、「午前零時」を使っている。また、「正午過ぎ」の時刻を表すには、「午後零時〇〇分」のようにして表すのが普通であることは、これまでみてきたところである。ラジオ・テレビ欄などは、特殊な表現をしているし、広告では、いろいろの表し方が行われている。
この「正午過ぎ」の時刻表示に関して、ある時計開発の会社が、人気投票を行ったところ、0時表示に賛成する人は、全体の20%弱で、12時表示に賛成する人が80%強であった、ということである。[これについて、詳しくは、例えば、昭和51年12月3日の読売新聞の記事を参照されたい。]